

Eine kontrastive Analyse von kontrollierenden Routineformeln kommunikativen Verhaltens im Deutschen und Japanischen

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/7693

コミュニケーション行動制御 慣用表現の日独比較の試み*

西 嶋 義 憲

目 次

0. はじめに
1. 問題提起
 1. 1. 期待のずれ
 1. 2. コミュニケーション行動制御慣用表現
 1. 3. 先行研究
2. 方 法
3. 結 果
 3. 1. 病院場面
 3. 2. けんか場面
4. 考 察
 4. 1. 優先される発話タイプ
 4. 2. 頻出語彙
 4. 3. 統合と対立
 4. 4. エピソードの解釈
5. おわりに

0. はじめに

本稿では、日本語とドイツ語のコミュニケーション行動の背景にある通常性の違いに焦点をあてる。文化的・社会的背景の異なる話者どうしが行なうコミュニケーションにおいて何らかの問題状況が生じた場合、話者間でその対処の仕方に違いが起きることがある。問題となる場面で、話者それぞれが自分では「当たり前」（「通常」「普通」）だと考える行動に違いがある可能性があるからである。本稿では、コミュニケーションの通常性を維持するため

に選択される行動には、それぞれの社会・文化で場面ごとに典型的に使用される慣用的な表現が関与していると仮定する。この仮定に基づき、日本とドイツで共通に起こりうる問題状況を設定し、それを解消するために典型的に使用されると見なされる慣用的言語表現を両言語それぞれについて収集する。収集された表現を言語学的に対照分析することにより、両言語の表現形式と語彙項目の類似点と相違点を明らかにする。そして、その結果と関連づけてそれぞれの社会で「通常」とされる行動の違いの一部を説明する。

1. 問題提起

1.1. 期待のずれ

日常的なコミュニケーションにおいて、話者は自分の言語行動に疑問を抱いたり、相手の言語行動に違和感を覚えることはきわめてまれである。それは多くの場合、対話相手と文化的・社会的背景を共有しているからである。ところが、文化的・社会的背景の異なる話者が自分の話し相手になった場合、相手の行動が奇妙に思えたり、自分自身の行動が相手にうまく理解されていないと感じたりする事態が生じうる。これは自分で「当たり前」だと思っているコミュニケーション行動が「当たり前」と感じられなくなったからである。つまり、この場合、自分が想定している「当たり前」の状態、すなわち通常性 (communicative normality) のあり方が話者間で異なることによる。「通常性」とは、一般に、コミュニケーションが通常通りに (すなわち、「普通に」「いつものように」) 問題なく行なわれている状態を説明する概念である (vgl. 丸井 2006, Nishijima 2006)。

コミュニケーションにおける通常性の違いを説明するために、具体的なコミュニケーション状況において異なる言語行動が認められた、個人的な経験に基づく事例を取り挙げる。2003年9月のできごとである。筆者の共同研究者であるドイツ女性が1年間の研究滞在のために、息子を連れてドイツから金沢にやって来た。筆者は二人を金沢駅で出迎え、自分の車がとめてある駐車場まで連れて行った。そして、車のドアを開け、二人に乗るよう促した。ところが、3歳になる息子が乗ろうとしない。ドイツから飛行機や電車に乗

り継ぎ、十数時間以上かけてやっと目的地の金沢にたどり着いたわけである。この男の子は、もうこれ以上狭い空間に閉じ込められ、移動するのはいやだと訴えた（たしかに筆者の車はそれほど大きくはなかった）。もちろん、その気持ちはわからなくもないが、車に乗らないことには住居となるアパートでゆっくりと休むことすらできない。母親はもう一度、乗ろうと促したが、子どもは再び拒否した。すると母親は、息子の手を引き駐車場内を歩き出した。息子を説得するための行動だろう。筆者は待った。何分かつたろうか。10分くらいが経過したように思えた頃、二人はやっともどってきた。そして息子は自分から「車に乗る」と言った。

この場面ですったドイツ人女性の行動は「普通」(normal)であろうか。ドイツ人にとっては、おそらく「当たり前」で「問題のない」行動と見なされるのかもしれないが、日本人には、いや少なくとも筆者にはそうは思えなかった。同様の状況に遭遇した場合、日本人の母親だったら、待っている筆者に配慮し、迷惑をかけないように、場合によっては泣こうがわめこうが、息子を抱き上げるなどして無理やりにも車に乗せたであろう。このように彼女のとった行動は筆者の期待とズレがあった。このエピソードが示唆しているのは、ある問題状況が生じた場合、そこでその対処として典型的にとられると期待される言語行動の日独の違いである。コミュニケーションにおいてそこでなされる言語相互行為がそれぞれの話者にとって「通常」どおりに、すなわち期待どおりに進行している場合、それぞれのコミュニケーションの通常性が維持されているといえることができる。ところが、上記エピソードの場面では、ある問題状況で異なる通常性に基づく行動が表面化し、それが衝突したことになる。その衝突では何が問題となっているのかに関する原理的な説明は、以下の慣用表現の分析結果に基づいて本稿の最後で行なう。

1. 2. コミュニケーション行動制御慣用表現

前節で通常性の衝突の例を紹介した。では、それぞれの文化・社会でのコミュニケーションの背景にある通常性はどのようにして獲得され、維持されているのであろうか。それには、社会化 (socialization) の過程において繰り返し耳にし、口にする日常的な慣用表現 (決まり文句) がその獲得に一定

の関与をしているものと考えられる。そこで、ある場面において問題となるような状況が生じた場合、それを通常にもどすために慣用的に選択される典型的な言語行動類型やそれに関連づけられる言語表現のタイプがあると仮定する。このような慣習化された類型的な表現を本稿ではコミュニケーション行動制御慣用表現 (Kontrollierende Routineformeln kommunikativen Verhaltens) と呼ぶことにする。この表現は、「当たり前」のコミュニケーション行動と一定の対応関係があり、それが使用される社会・文化のコミュニケーションにおいて何に注目ないし配慮して行動すべきなのかについて示唆を与えてくれるものと期待できる。

そこで、本稿では、日本語社会とドイツ語社会の対応する場面において共通に生じる問題状況を想定し、それに対処するために選択される言語行動類型とそれに関連付け可能な言語表現のタイプを収集し、対照する。それにより、慣用表現の表現形態および語彙の異同を明らかにする。また、このような慣用化された表現どうしの比較を通じて、日独両社会のコミュニケーション上の通常性を形成する視点の違いを明らかにする。

1.3. 先行研究

本研究が主に興味をもつのは、日独のコミュニケーション行動の通常性を構成する協調のあり方の違いである。そのような協調行動を分析するアプローチの一つに、コミュニケーション行動評価概念 (Bewertende Konzepte kommunikativen Verhaltens) の分析がある。コミュニケーション行動評価概念とは、日本語なら「ていねい」「親切」「生意気」、ドイツ語では「höflich」「freundlich」「überheblich」など、コミュニケーションにおいて対話相手や自分の行動を評価する概念のことである。これらの概念は、それが使用される社会で「当たり前」とされるコミュニケーション行動を直接的・間接的に説明するものである。これらを収集し、分析することで、当該社会の行動規範を明らかにすることができると考えられる¹⁾。このような概念の対照研究の初期には、まず日英の比較がなされた (Ide *et al.* 1992)。日独のコミュニケーション行動評価概念を対照した研究としては、Marui *et al.* (1996)、Nishijima (2000)、西嶋 (2000)、Kuhlmann (2005) などがある。これらの

研究は、日独の評価概念を対照することにより、両言語社会で通常とされるコミュニケーション行動を抽出しようと試み、基本的な協調のあり方の差を明らかにしようとしている。

ここで生じる疑問は、この協調様式や規範はどのようにして獲得されるのかということだ。すでに触れたように、この習得には、社会化の過程で、場面に応じて適切な行動ができるように繰り返し使用される慣用表現が関与していると仮定することができる。これまでなされてきたコミュニケーションに関わる慣用表現の研究はそれほど多くない。日常的に使用される慣用表現のコミュニケーション上の機能に関する初期の研究には、Coulmas (1981a, b) がある。ここでは、いわゆる挨拶言葉などを対象に、そのコミュニケーション機能が分析されている。また、西嶋 (2003) と Nishijima (2006) は、日本とドイツという異なる文化間について、同じような日常的場面で使用されるコミュニケーション上、等価と見なされる慣用表現を比較し、表現形式が構成する視点の違いを明らかにしている。このような言語表現の構成に関する比較は、それぞれの文化や社会における価値観や規範と関連づけ可能である。本研究は、日独それぞれの社会化の過程で使用される慣用表現に着目し、その言語学的分析を行なうものである²⁾。それをとおして、両文化の通常性の違いにアプローチを試みる。

2. 方 法

日本語とドイツ語の言語行動類型およびそれに関連付けられる言語表現が適切に比較できるように、両社会で共通するコンフリクト場面を設定し、そのコンフリクトを解消させるために典型的に発せられると期待される言語行動を記入式アンケート調査によって収集した。コミュニケーション行動の基本的なあり方は、社会化の過程で習得されると考えられる。とするなら、社会化の過程にある子どもに対して親や大人が発する言語表現を収集し、分析することで、それぞれの社会が要求するコミュニケーション行動の基本的あり方が明らかにできると考えた。そこで、社会化の過程にある幼稚園児に対して発せられる言語表現に着目し、園児の保護者からそのデータを収集する

ことにした。

調査の対象としたのは、日本とドイツの幼稚園に通う園児の保護者である。金沢市の幼稚園は、筆者の勤務する大学から一番近い幼稚園を選んだ。ドイツはデュッセルドルフ市にある大学近くの幼稚園に調査を依頼した。なお、本調査は、将来の本格的な研究を行なうための基礎という位置づけなので、日本とドイツの幼稚園1園ずつに調査対象を限定した³⁾。

調査の方法は、一度に多量のデータを収集しやすい記入式アンケート調査法で行なった。特定の場面を想像させ、その場にいた場合に用いる可能性の高い表現を書かせる内容である。対象とした幼稚園に通う園児の保護者に調査票を配布し、期限までに回答してもらい、回収した。本報告で取り上げるのは、調査項目のうちのつぎの異なる二つの場面である。一つは病院の待合室という公的な空間であり、他の一つは自宅という私的な空間である。それぞれの場面で、子どもが引き起こすコンフリクト状況を想定させ、それに対してどのように対処するのかを調査した。①調査場面と②調査内容はつぎのとおりである：

①調査場面

場面1：病院（医院）の待合室で自分の子どもが騒いでいる。周りの人たちがこちらをチラチラ見ている。そのとき、その場で何かを言うか、後で何かを言うか、あるいは何も言わないかを尋ねた。

場面2：自宅に子どもの友達を招き、子どもどうして遊ばせている。ところが、あるおもちゃをめぐる争いが始まった。それを見たとき、その場で何かを言うか、後で何かを言うか、あるいは何も言わないかを尋ねた。

②調査内容

収集された言語表現は、主に文形式（統語論）と語彙（意味論）という二つの観点から分析した。

3. 結 果

3.1. 病院場面

これは、病院の待合室という公共空間で子どもが騒いでいるという場面である。ここで言及されているような行動をそのまま放置することは、保護者として社会的に許容できるものではない。この状況で期待されるのは、子どもを大人しくさせるために行なわれる言語行動である。この問題状況を解消するために、どのような発話行為類型が選択され、それを実現するためにどのような表現が発話されるのだろうか。

すぐに予想できるのは要請行為である。要請行為には命令文が一番効率的と判断されるので、それが多用されるはずである。また、使用語彙としては「静か」「黙る」「大人しい」といった意味の表現が選択されると予想できる。

3.1.1. 発話タイプの日独比較

分析の結果、要請行為を直接的な形で表現する言語表現タイプが二種類使用されていることがわかった。次ページの表1で示されているように、日本語とドイツ語の両言語とも、「指示」タイプ表現と「促し」タイプ表現が顕著に見られ、両タイプを合計すると9割前後を占める。「指示」タイプとは、統語論的に、省略も含めて対話相手のみを主語とするもので、「促し」タイプはその主語に対話相手のほかに話者も含まれるものである：

1) 「指示」タイプ (主語は対話者のみ)

「指示」タイプ表現とは、「～なさい」「～して」といったように直接的に相手に指示を行なう文形式や命令表現である。例：
「静かにしなさい」「Sei bitte still」。

2) 「促し」タイプ (主語は対話者のほかに話者も含む)

「促し」タイプ表現とは、「～しよう」といったように相手だけでなく話者も同様の行動をとるように仕向ける勧誘表現である。例：
「静かにしよう」「Lass uns etwas spielen」。

表1：発話タイプの出現率の日独比較（％）

発話タイプ	日本	ドイツ
「指示」タイプ	56.8%	93.1%
「促し」タイプ	32.4%	6.9%
その他	10.8%	0%
計	100.0%	100.0%

日本については、すべての発話のうち56.8%が「指示」タイプに、32.4%が「促し」タイプに属することがわかった。「その他」には、「病院は静かにするところ」といったような一般ルールを説明するタイプが含まれる。

他方、ドイツ側はより単純であり、全発話は上記の二つのタイプとしてしか出現しない。しかも、全発話のうち93.1%が「指示」タイプという結果となり、もっぱらこのタイプが使われることがわかった。

3.1.2. 頻出語彙の日独比較

つぎにこの場面で発せられる発話に含まれる語彙の出現頻度を比べてみよう。次ページの表2から見てとれるように、日本では、全発話の81.1%の発話で「静かに」が現われ、48.6%で「病院」が使われている。ドイツは、日本語の「静かに」と同じ内容を表わす「leise」（「leiser」は比較級だが、同一表現と見なす）が全発話のうち82.8%で使用されている。二番目に多いのは、24.1%で「stören」（邪魔をする）である。

両言語とも8割以上の表現に「静かに」とそれに対応するドイツ語の「leise」が出現している。

3.1.3. 発話タイプと理由説明

「指示」タイプ表現と「促し」タイプ表現のそれぞれについて、理由を伴っているかどうかを調べてみた。結果は次ページの表3にまとめてある。日本語の表現全体については、理由つきの表現は59.5%であるが、理由なしは40.5%

表 2：頻出語彙の日独比較 (%)

順位	日本語	割合	ドイツ語	割合
(1)	「静かに」	81.1%	「leise/leiser」	82.8%
(2)	「病院」	48.6%	「stören」	24.1%
(3)	「しんどい」 「病 気」 「迷 惑」	16.2% 16.2% 16.2%		

表 3：理由説明付きの発話タイプ (%)

発話タイプ	日本語	ドイツ語
理由付「指示」タイプ	47.6%	55.2%
理由付「促し」タイプ	100.0%	50.0%

である。理由のついていない発話が4割以上を占めている。個別のタイプごとにみると、「指示」タイプ表現については、理由なしは52.4%である。ということは、「指示」タイプ表現では半分以上は理由を伴っていない。ところが、「促し」タイプ表現は全て理由との関連づけがなされている。

ドイツ語については全体の半分程度にしか理由が付されていない。「指示」タイプ表現の55.2%、「促し」タイプ表現の50.0%というように、約半数の表現に理由が付けられている。ただし、前者のタイプの発話数が圧倒的に多いので、後者のタイプの表現の全数は無視できるほど少ないと言わざるをえないが。

3.1.4. 理由の内容

理由内容については、日独ともにその言及対象は大きく「他者」と「病院」

の二つに分けられる。以下の表4に示されているように、日本では、理由を挙げる際に、病院に言及するものが13.0%，他者に言及するものが87.0%である。前者は、「病院では静かにするところ」といった一般的な規則として提示している。後者はさらに、「他者の病気」(73.9%),「他者の迷惑」(8.7%),「他者の視線」(4.3%)の三つに分けられる。それぞれの例を挙げてみよう：「病院は病気の人いっぱい来ているから」「他の人の迷惑になるから」「他の人、見てるから」。他者の病気に言及するものが7割以上を占めている点が目立つ。

ドイツ語でも同様に、病院に言及するものが11.8%で、他者に言及するのが88.2%である。後者についても日本と同様に三タイプに分けられる。すなわち、「他者の邪魔」(41.8%),「他者の病気」(29.4%),「他者の存在」(17.6%)である。それぞれについて例を挙げるとつぎのようになる：「Du störst die anderen Leute im Wartezimmer.」「Weil sie krank sind.」「Du bist nicht zu Hause.」。ドイツでは、他者言及に関して、半数以上を占めるものはなく、ばらつきがある結果となった。その中で比較的多いのが「邪魔する」(stören)という表現である。

表4：理由の内容の言及タイプ (%)

日 本			ドイ ツ		
言及対象	内容タイプ (内訳)	割合	言及対象	内容タイプ (内訳)	割合
他 者	(1) 他者の病気 73.9%	87.0%	他 者	(1) 他者の邪魔 41.2%	88.2%
	(2) 他者の迷惑 8.7%			(2) 他者の病気 29.4%	
	(3) 他者の視線 4.3%			(3) 他者の存在 17.6%	
病 院	病院での振舞い	13.0%	病 院	病院での振舞い	11.8%
計		100.0%	計		100.0%

3.2. けんか場面

二つめに想定させたのは、自宅という私的な空間において一つのおもちゃをめぐる二人の子どもがけんかをしているという場面である。このような争いは、病院場面とは違って、必ずしも緊急にやめさせる必要はない。選択肢として、そのまま放置する場合と何らかの言語行動をとる場合がありうる。情報提供者たちはどのような態度をとったのだろうか。この問題状況に対処するために、どのような発話行為類型が選択され、それを実現するためにどのような表現が使われたのだろうか。

3.2.1. 発話タイプの日独比較

病院場面の際に使用された、「指示」と「促し」という二つのタイプの表現以外に、日本語ではもう一つの特徴的な表現タイプである「提案」タイプが確認された(表5を参照)。これは、「～したら」「～するといいよ」といったように問題を解決するためにすべき行動を提案するタイプである。したがって、ここでは統語論的に3タイプに分類して比較する。

日本については約8割が「指示」「促し」「提案」の3タイプに分類される。それぞれの例は、「貸してあげなさい」「仲良く遊ぼう」「かわりばんこに使うといいよ」である。ここでは、「指示」タイプの多かった病院場面と違って、「促し」タイプの頻度が一番高く、46.2%という出現率である。他方、ドイツは、病院場面とほぼ同じ分布で、9割以上が「指示」タイプという結果になっている。「指示」タイプと「促し」タイプの例は、それぞれ「Gib das Spielzeug doch deiner Freundin.」「Lass uns etwas zusammenspielen.」である。

表5：けんか場面の発話タイプ (%)

	日本語	ドイツ語
「指示」タイプ	19.2%	96.2%
「促し」タイプ	46.2%	3.8%
「提案」タイプ	15.4%	0%
その他	19.2%	0%
計	100.0%	100.0%

3.2.2. 頻出語彙の比較

多用される表現のベスト3は以下の表6のとおりである。日本語では半数近くの表現に「順番」（および、その類義語）が使われている。それに続いて、「仲良く」と「貸してあげる」が出現頻度が高い。他方、ドイツ語では、話し合って取り決めるといった内容を表わす「sich einigen」（ほぼ同義の「ausmachen」を含める）が一番多く使われる。この表現は全体の26.9%を占めている。それに、わかちあいを表わす「teilen」（ほぼ同義の「gemeinsam spielen」を含む）、「abwecheln」（順番にする）と「nicht streiten」（けんかしない）が続く。

3.2.3. 発話タイプと理由説明

理由が付与される表現は、日本語で全体の10%以下（9.4%）、ドイツ語で全体の12%以下（11.5%）しかないので、けんか場面については考慮外とする。

3.2.4. 理由の内容

理由内容についても、前節と同様に数量的に少ないので、考慮しないことにする。

4. 考 察

4.1. 優先される発話タイプ

上の結果の表1から明らかなように、病院場面では、日本語とドイツ語で

表6：頻出語彙の日独比較（%）

	日本語	割合	ドイツ語	割合
(1)	「順番」（「かわりばんこ」「交代」を含む）	47.4%	「sich einigen」（「ausmachen」）	26.9%
(2)	「仲良く」	18.4%	「teilen」（「gemeinsam spielen」）	15.0%
(3)	「貸してあげる」	15.8%	「abwecheln」	11.5%
			「nicht streiten」	11.5%

はもっぱら「指示」タイプ表現と「促し」タイプ表現が用いられる。日本では、それぞれ56.8%と32.4%であるが、ドイツ語では「指示」タイプが93.1%で圧倒的多数を占める。興味深いことに、日本人の約3割が「促し」タイプを使う傾向にあるが、ドイツでは6.3%と1割にも満たない。日本語で「促し」タイプを比較的多く使う傾向は、けんか場面でも同様に認められる(表5を参照)。ところが、日本語のけんか場面では「指示」タイプの使用頻度が下がり、2割程度になっている。しかしながら、ドイツ語では、場面が異なっても一貫して「指示」タイプが96.2%という高率で使われている。

一般的に言えば、日本語では、場面によって表現形式の統語論的な使い分けが行なわれているといえるが、全体的にみると「促し」表現が比較的多い。病院場面では約32%、けんか場面では約46%である。また、けんか場面では「提案」タイプも選択される(状況依存傾向)。他方、ドイツ語は場面にかかわらず、ほとんどが一貫して「指示」表現を選択している(状況独立傾向)⁴⁾。このような好まれる表現形式の違いは、日本人が、相手と対立的にコミュニケーションするよりも相手を含めた統合的な視点からコミュニケーションを行なうために、子どもに対して一方的に指示を出すことを好まないことを示唆している⁵⁾。

4. 2. 頻出語彙

表2から見て取れるように、「静かに」とそれと同義の「leise」が共通して8割以上の表現に使われている。公的な場面では、この表現を使って要請行為が行なわれることがわかる。

4. 2. 1. 病院場面の理由内容の対照

表3が示すように、日本語の理由の有無については、発話タイプによってばらつきがあるが、「促し」タイプにはすべて理由がつけられていた。「指示」タイプの発言は有無を言わずに従わせるので、理由は必ずしも必要ないが、「促し」タイプの発言は強制という意味が薄れているので、理由があるのが自然に思われる。前節の「統合的」という傾向は、この理由を挙げる行為においても認められる(表4を参照)。すなわち、日本では理由文の7割以上

が他者の病気や他者の感情に言及している。また、理由の内容は、母親が子どもに他者の病気を感じさせようとする共感的態度に基づいているからである。

もちろん、ドイツ人も同様に他者の感情に言及するが、その頻度は約3割にとどまっている。たしかに、ドイツ人は自分の子どもたちが他者を悩ませている (stören) ことに言及している (41.2%)。しかし、そのような他者を悩ませる行為についての言及は、誰がそれに対して責任を負うべきなのかを示しているのであって、悩まされている本人が何を感じているかについては問題にされていない。したがって、ドイツでは子どもに対しては責任に関して対立するような形で接していることになる⁶⁾。

4. 2. 2. けんか場面での要求内容の対照

語彙の点から対照してみよう (表6を参照)。ドイツに関しては、けんか場面では、日本語にはその対応物がない合意形成に関わる「sich einigen (ausmachen)」が特徴的といえる。ドイツ人の第一の関心というのは、子どもたち自身が当事者なので、自分たちで話し合って解決策を見出せるように仕向けるための指示にあるようだ。ここでの当事者はけんかをしている二人で、その二人が自分たちで解決すべき問題とされているのだ。他方、日本人の親は自分たちの子どもたちに協議させて一致を見出させるよりもその場で速やかに問題状況を解決させるために、「かわりばんこ」などのように具体的で実質的な提案を行なっていることがわかる。したがって、当事者という観点からは、母親もそこに含まれていることになる。

4. 3. 統合と対立

日本とドイツのコミュニケーションや言語相互行為の対照研究で、それぞれに特徴的な協調様式の傾向として、統合と対立 (ないし競合) があることはさまざまな研究で報告されている (丸井 1992, Reinelt 1992, 大浜 1992, Nishijima 2006)。本稿における慣用的な表現の分析は、日本とドイツを特徴づける統合と対立という傾向が、言語表現にも認められるということを示唆し、この傾向を確認することができたと考える。

4. 4. エピソードの解釈

同一場面での日本人とドイツ人の行動に、当事者という観点から統合的と対立的という特徴が引き出せた。これに基づいて、冒頭で紹介したエピソードを解釈してみよう。

駐車場でコミュニケーションに関わっていたのは誰か？ドイツ人の理解によれば、母親と息子の二人である。そこでは二人の視野には筆者は入ってきていない。なぜなら、子どもが車に乗らないという事態に関するコミュニケーションの当事者は母親と息子に限定され、この二人によって問題状況が解決されなければならないと考えられるからである。しかし、日本人の解釈に基づけば、筆者も当事者の一人としてそこに関与していることになる。なぜなら、コミュニケーションは筆者への配慮を基に統合的になされていると理解されるからである。このようなコミュニケーションの当事者性の局地性と全体性にかかわる違った方式は社会的相互行為の基本的な協調のありかたにおける違いに由来する (Marui 1995)。

5. おわりに

グローバリゼーションの世界的な広がりにより、異なる社会的文化的背景をもった人たちとの接触が日常化し、異文化間のコミュニケーションが「普通に」見られるようになった。その結果、コミュニケーションも容易になったと考えられがちである。ところが、実際はそうではない。異文化間コミュニケーションは日常的にどこでも起こる事態で、そのような場面では、本稿で見たように、話し方はそれぞれの社会によって異なり、それが表現法や理解に影響を与えているため、誤解が生じることがある。その意味で、グローバリゼーションへと向かってはいるが、それぞれの社会に特有のコミュニケーション・スタイルに注目する必要があるだろう (Clancy 1986)。そのようなコミュニケーションスタイルの違いに着目し、それぞれの社会のコミュニケーションにおいて他者と適切に協調する仕方を明らかにするために、本稿で提出したコミュニケーション行動制御慣用表現の日独対照研究は重要な貢献をなすと期待される。

注

* 本稿は下記の小論の改訂日本語版である：

Yoshinori Nishijima: "For a Contrastive Study of Routine Formulas for Controlling Communicative Behaviors in German and Japanese: A Pilot Investigation"(英文). In: S. Kusune / Y. Nishijima / H. Adachi (eds.) : *Socio-Cultural Transformation in the 21st Century? Risks and Challenges of Social Changes*. 金沢電子出版, 2007, 347-357. (なお、この拙論は、2006年10月12～15日に金沢大学で開催された日独社会科学学会での口頭発表用原稿に加筆したものである。)

1) 同様の発想は、方言における性向表現の研究にも見られる。室山 (2004) を参照。

2) 磨矢 (2006) は、日本とドイツのしつけの異同を言語表現 (しつけ言葉) と保護者の教育方針という視点から分析している。

3) 調査を実施した幼稚園はつぎのとおり：

金沢市の T 幼稚園：実施時期 2004年11月 (有効回答数37, 回収率74%)

Düsseldorf の S 幼稚園：実施時期 2005年11月 (有効回答数33, 回収率66%)

日本の資料については磨矢順子氏、ドイツの幼稚園については Julia Kuhlmann 氏の協力を得た。記して感謝する。たしかに回答数は統計学的に十分とは言えないかもしれない。しかし、今後の研究のためのパイロット調査として、ある種の傾向を見出す機能は十分果たしていると考ええる。

4) ドイツ語でもっぱら「指示」タイプ (命令形) が使われるのは、相手が子どもだからであろう。たとえば、Brown/Levinson (1987) などのポライトネス理論によれば、一般に西欧社会では成人どうしの会話では直接的な指示表現を使用することはまれである。個人の自由な行動が制限されると考えるからである (p. 62)。

5) 牧野 (1978) では、日米の料理法の文章が比較されている (第6章)。それによると、米語には命令文を中心とした指示表現が圧倒的に多い。ところが日本語では、命令文はほとんど認められず、主語が明示されていない終止形で終わる表現が大部分であった。主語が明示されていないということは、それが指示者としての著者とも指示を受ける読者とも解釈可能であるということである。そして、このような主語の省略が「筆者・読者の一体感」を形成しているのではないかと指摘している (p. 120)。この種の表現は、話者と聞き手を明確に区分しないという点で、本稿の「促し」タイプと共通している。

6) 「stören」の意味は、ある辞書によると、「ある人をその安息からまたは活動から引き離し、望んでいた状態や進行を中断させること (jmdn. aus seiner Ruhe od. aus einer Tätigkeit herausreißen, einen gewünschten Zustand od. Fortgang unterbrechen)」(DUW p. 1526) とある。この説明からもわかるように、他者への働きかけ (他動詞性) が強調されている。他方、日本語の「迷惑」は、たとえば『広辞苑』では「他人から厄介な目にあわされて困ること」(2616ページ) と定義されている

ように、他者の行為による心理的・肉体的に否定的な影響（被害者性）が前面に出される傾向にある。

参考文献

- Brown, P. & S. C. Levinson: *Politeness. Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge UP, 1987.
- Clancy, P. M.: "The acquisition of communicative style in Japanese." In: B.B. Schieffelin & E. Ochs (eds.): *Language socialization across cultures*. Cambridge: Cambridge UP, 1986, 213-250.
- Coulmas, F.: *Routine im Gespräch. Zur pragmatischen Fundierung der Idiomatik*. Wiesbaden: Athenaion, 1981a.
- Coulmas, F. (ed.): *Conversational Routine. Explorations in standardized communication situations and prepatterned speech*. The Hague: Mouton, 1981b.
- Kuhlmann, J.: "Sind Deutsche weniger kooperativ als Japaner? Eine semantische Untersuchung". In: *Lebende Sprache* Nr. 2, 2005, 68-76.
- 牧野 成一：『ことばと空間』。東海大学出版会，1978。
- 丸井 一郎：「談話の相互行為的基礎と『協調』の概念」。In：『ドイツ文学』第88号，1992，89-100。
- 丸井 一郎：『言語相互行為の理論のために 「当たり前」の分析』。三元社，2006。
- Marui, I.: "Argumentieren, Gesprächsorganisation und Interaktionsprinzipien. —Japanisch und Deutsch in Kontrast". In: *Deutsche Sprache* Heft 4, 1995, 352-373.
- Marui, I., Y. Nishijima, K. Noro, R. Reinelt & H. Yamashita: "Concepts of Communicative Virtues (CCV) in Japanese and German". In: M. Hellinger & U. Ammon (eds.) : *Contrastive Sociolinguistics*. Berlin / New York: Mouton de Gruyter, 1996, 385-409.
- 磨矢 順子：「しつけ言葉から探る日本人とドイツ人の行動基準」。In：『論文集』（2005年度金沢大学経済学部社会言語学演習研究論集）第1号，2006，27-63。
- 室山 敏昭：『文化言語学序説 ——世界観と環境——』。和泉書院，2004。
- 西嶋 義憲：「コミュニケーション行動評価概念研究のための予備的考察 一対照社会言語学の観点から」。In：『金沢大学経済学部論集』第20巻第1号，2000，107-132。
- 西嶋 義憲：「“Was kann ich für Sie tun?” は『偉そう』か？ 一常用句を利用したコミュニケーション行動の比較」。In：『かいろす』第41号，2003，19-36。
- Nishijima, Y.: "'Freundlich' und 'höflich': Interkulturelle Aspekte des kommunikativen Verhaltens". In: 金沢大学外国語教育研究センター『言語文化論叢』第4号，2000，185-207。
- Nishijima, Y.: "Perspektive in Routineformeln im Deutschen und Japanischen". In: 金沢大学外国語教育研究センター『言語文化論叢』第10号，2006，157-182。

大浜 るい子：「談話分析 一日独のあいだの『話し合い』」。In: 『ドイツ文学』第88号, 1992, 111-123.

Reinelt, R.: "Gesprächsorganisation: Sprecherwechsel im Deutschen —In Kontrastierung mit dem Deutschen". In: 『ドイツ文学』第88号, 1992, 101-110.

辞 書

DUW: *Duden Deutsches Universalwörterbuch*. Hrsg. von der Dudenredaktion, 4., neu bearb. und erw. Auflage. Mannheim / Leipzig / Wien / Zürich: Duden Verlag, 2001.

『広辞苑』: 新村 出編『広辞苑』. 第五版, 岩波書店, 1998.